

ウルグアイ林木育種計画
アフターケア短期調査及び調査団報告書

平成 12 年 1 月

国際協力事業団

自然森

J R

00-001

**ウルグアイ林木育種計画
アフターケア短期調査及び調査団報告書**

平成 12 年 1 月

国際協力事業団

序文

日本国政府は、ウルグアイ東方共和国政府からの技術協力の要請を受け、農牧研究所（I N I A）において、林木育種計画を平成2年1月から平成7年1月までの5年間にわたり実施しました。

国際協力事業団は、協力期間終了後1年半余りを経た同計画の状況や協力効果の把握を行い、アフターケア協力の必要性及び可能性について協議することを目的として、平成11年7月9日から28日まで植月 充孝氏を短期調査員として、また、平成11年9月25日から10月10日まで、農林水産省林木育種センター育種部長 田島 正啓氏を団長とするアフターケア調査団を同国に派遣しました。短期調査員及び調査団は、ウルグアイ東方共和国政府関係者と協議を行うとともに、現地調査や関連資料収集を行いました。そして帰国後、国内作業を経て、調査結果を本報告書に取りまとめました。

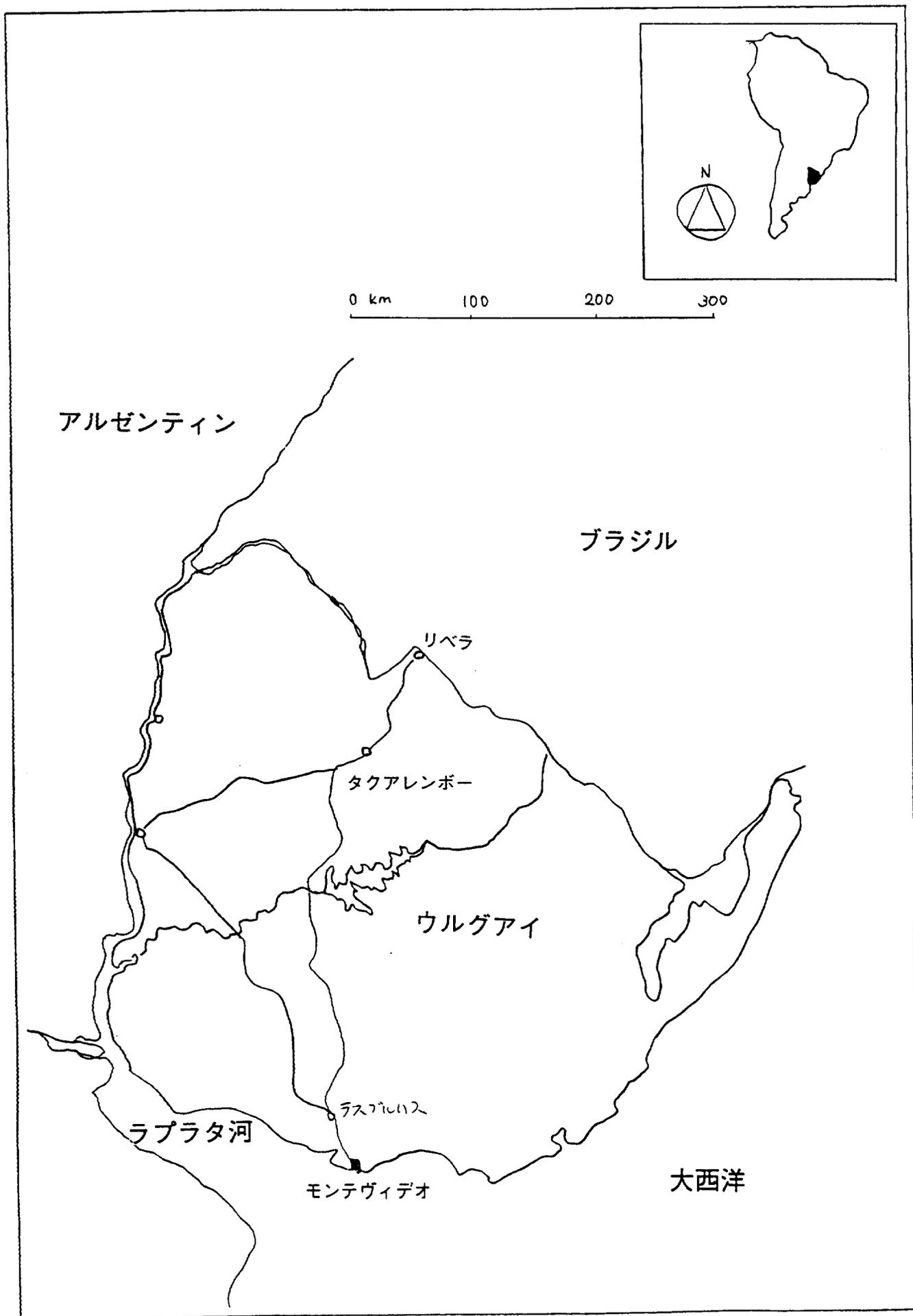
今回の調査結果が本アフターケア協力の実施の指針になるとともに、アフターケア協力の実施が今後の両国の友好・親善の一層の発展に寄与することを期待いたします。

終わりに本調査の実施にご協力とご支援をいただいた関係者の皆様に対し、心から感謝の意を表します。

平成12年1月

国際協力事業団
理事 後藤 洋

プロジェクト位置図





INIAタクアレンボー試験場に隣接する
E. grandis の実生採種林



幹の先端部を切断して採種する



E.grandis 落枝性の悪い個体



E.grandis 落枝性のよい個体



E.grandis ねじれのある個体



E.grandis ねじれの少ない個体



‘97年当時の霜害被害地



INIAタクアレンボ-試験場



組織培養試験



E.grandis を始めとする種子の保管庫

目次

序文

位置図

写真

短期調査報告書

1	短期調査員の派遣	1
1-1	調査結果の要約	1
1-2	アフターケア要請の背景	2
1-3	現在までの経緯	2
1-4	短期調査派遣目的	3
1-5	調査の方法	3
1-6	調査員の構成	3
1-7	調査日程	3
1-8	主要面談者	4
2	要請の背景	5
2-1	ウルグアイの森林、林業、環境関連政策	5
2-2	アフターケアの活動の概要と成果	5
2-3	アフターケア実施機関の現状及びプロジェクト終了後の活動状況	6
3	要請の内容	6
4	ウルグアイ側のアフターケア実施体制	8
4-1	実施機関の組織及び事業概要	8
4-2	実施機関の予算措置	9
4-3	建物、施設	9
4-4	カウンターパートの配置計画	9
4-5	政府関係機関の支援体制	10
5	アフターケアの基本計画	10
5-1	アフターケアの目的	10
5-2	実施計画の概要	10
5-3	活動分野別協力内容	10
5-4	専門家派遣計画	11
5-5	研修員受け入れ計画	11
6	専門家の執務・生活環境	11

アフターケア調査団報告書

1	アフターケア調査団の背景	13
1-1	調査結果の要約	13
1-2	プロジェクト要請の背景	14
1-3	現在までの経緯	14
1-4	アフターケア調査団派遣目的	15
1-5	調査の方法	15
1-6	調査団員の構成	15
1-7	調査日程	15
1-8	主要面談者	16
2	アフターケアの基本計画	16
2-1	プロジェクトの目的	16
2-2	実施計画の概要	17
2-3	活動課題別協力内容	17
3	専門家の執務、生活環境	20
4	協力実施にあたっての留意事項	20
5	提言	20
	資料 署名ずみミニッツ	23

1 短期調査員の派遣

1-1 調査結果の要約

ウルグアイから我が国に対し、霜害抵抗性のための育種、材質育種、交配・交雑技術及び林木育種へのバイオテクノロジーの利用等についてアフターケア協力要請があり、これらの活動内容について、国立農牧研究所（以降INIAという）林業部と協議し合意した。

「霜害抵抗性のための育種」については、対象樹種を霜害常習地帯に広く植林されている*E.grandis*とする。霜害抵抗性の検定技術は、冷凍庫を使用した特殊検 定技術を開発する。この検定技術をもって、'97年冬季に発生した霜害林から、霜害抵抗性候補木を選出して、霜害抵抗性を検定する。

「材質育種」については、対象樹種を製材用として最も多く使用されている*E.grandis*とする。木材の改良の対象となる形質は、内面形質として材の割れ・狂いに関わる成長応力の大きさが、また外面形態については幹の通直性、緩慢性、落枝性、枝の太さ、岐出角度等が重要になるとのことで合意した。さらに、成長応力の測定が立木のままで実施できる機器が販売されており、重要となる材の内面形質が、立木のままで測定できるのであれば、材質育種として特に項目をあげなくても、*E.grandis*については、2世代プラス木の選抜基準をより材質の改良にシフトさせることで、事足りるとの合意に至った。このような方法で材質育種を行うことについて、大規模な製材部門を抱えた企業2社から意見を聞いた結果、いずれも賛意が得られた。

「交配・交雑技術」については、対象樹種を着花開始樹齢の早い *E.grandis*とする。対象樹種以外の*E.globulus*及び*E.maidenii*の着花開始が3～4年後と見込まれることから、アフターケアでは交配基礎技術開発のための調査にとどめて、具体的には（交配袋の質と大きさ）、（除雄の方法）、（受粉の方法）等について実施する。

「林木育種のためのバイオテクノロジー利用」については、対象樹種を *E.grandis*、*E.globulus*及び*E.maidenii*とする。まず組織培養によるクローン増殖技術は、林木育種計画（以降プロジェクトという）に派遣された短期専門家が、*E.grandis*を用いて開発した、培地でのマイクロプロパゲーション技術を実用化するとともに、この培地組成を多少変化させて、*E.globulus*及び*E.maidenii*へも試用する。次に2世代プラス木クローンのDNAによる同定・識別技術を習得する。このことは、ウルグアイに導入されたユーカリの原産地が、プロジェクトで導入された産地試験地用種子を除いて、明らかでない場合が多く、2世代プラス木クローン間の近縁度を明らかにすることは、近将来2世代プラス木クローンによる採種・穂園を造成する上で不可欠になる。

「アフターケアに育種事業の高度化を追加する件」については、今回の協議の中で I N I A 林業部が *E.grandis* の 2 世代実生採種園を造成したこと、プロジェクトで造成した次代検定林及び産地試験林からの、2 世代プラス木の選抜を強く希望していることなど、林木育種事業の高度化に向けた取り組みに強い関心を持っていることが伺われた。国際協力事業団（以降 J I C A という）としても、プロジェクトで実施した育種事業を I N I A が継続進展させて、目前に迫りつつある育種事業の高度化への取り組みは、アフターケアの重点として位置づけられる。と、概略次のように説明した。林木育種事業を効率的に進める上で連続性が重要になり、そのためには間断なく 1 歩 1 歩着実に事業と技術開発を相進める必要がある。育種事業の高度化の課題として 2 世代実生採種園の造成、2 世代プラス木の選抜及びクローン養成等が考えられ、そのための最大技術開発課題は、クローン増殖技術である。これに対し I N I A タクアレンボー試験場長及び I N I A 林業部と合意を得た。

1-2 アフターケア要請の背景

ウルグアイ国は、広大な草原を利用した牧畜業が伝統的産業として栄えてきたが、近年牧畜産品の輸出不振に加えて、約 350 万ヘクタールの造林適地（牧畜生産より林業の方が収益性の高い土地）を有し、政府も林業奨励政策を施行するなど、最近林業が新たな経済基盤として、発展しつつある。このような情勢に対応し、ウルグアイ林業の健全な発展をはかるために、国産優良種子生産体制の確立が基本的要素となり、I N I A において J I C A による、プロジェクトが実施された。その後はウルグアイ側の自助努力により、国産種子の品質の向上を目的として、目前に迫りつつある育種事業の高度化へ取り組むところであるが、このためにはより高度な技術の習得及び開発が残されており、さらに追加的な協力を必要としている。

1-3 現在までの経緯

プロジェクトはウルグアイ国の北部、タクアレンボー市に所在する I N I A タクアレンボー試験場をプロジェクトサイトとして、'93 年 3 月から 5 年間実施された。プロジェクトの対象樹種は *E.grandis*、*E.globulus*、*E.maidenii* の 3 種である。プロジェクトは 2 本の柱からなっており、その 1 本の柱はウルグアイに既存する林分から、プラス木を選抜して採種し、次代検定林と実生採種園を造成した。他の 1 本はオーストラリアの原産地から母樹別に種子を購入して、産地試験林を造成した。

I N I A は協力終了後も、育種情報の収集を目的とした次代検定林、産地試験林及び実生採種園等の生長量調査、さらには実生採種園の整備等の取り組みが継続的に実施されている。そして実生採種園のうち、着花開始樹齢の早い

*E.grandis*の実生採種園から改良種子の生産が始められている。一方次代検定林及び産地試験林から2世代プラス木の選抜が可能になりつつあり、また、近年の人工造林地の拡大に伴い、発生が問題化している霜害への抵抗性の付与、さらには建築材、家具材など高付加価値用途に適する材質改良への取り組み等、より高度な育種事業と技術開発に対する期待と要望がたかまっており、ウルグアイ国からこれらに関し、アフターケアの要請が行われた。

1-4 短期調査員の派遣目的

- (1) 要請内容を確認する。
- (2) プロジェクト終了後の現況調査を行う。
- (3) 協力の基本構想(案)及び各分野の全体活動計画(案)作成のための詳細情報の収集・整理を行う。

1-5 調査の方法

(1) INIA林業部と要請内容について協議した。ウルグアイ国からの要請内容が、項目だけだったので、項目ごとの活動内容を具体化することから始めることとし、ウルグアイ側へ活動内容の説明を求めた。しかし、それに対して、調査員がアフターケアで必要とされる具体的な活動を説明をしてから協議する方法を進めたいとのINIA林業部の回答があり、調査員も了承した。

(2) INIA林業部と協議したアフターケアの内容が、広く支持される内容になっているかどうか、林業地域に所在する3つの企業を訪ねて、意見を聞くとともにアフターケアへの協力を要請した。

(3) (1)と(2)の結果について、INIAタクアレンボー試験場長及び林業部長と協議した。

(4) 以上の調査によって合意した協力内容について、農牧水産省植林局長及びウルグアイ国立大学林学科教授に説明して意見を聞いた。

(5) INIA総局長に、合意した協力内容を逐次説明して確認を得た。

(6) 実生採種園、次代検定林、産地試験林、樹種・産地試験林及び霜害林等を視察して、プロジェクト後の業務の継続性あるいは、アフターケアでの2世代プラス木の選抜、耐霜性候補木の等の可能性について調査した。

1-6 調査員の構成

短期調査員 植月 充孝

1-7 調査日程

- | | |
|----------|--------------------------|
| 7月 9日(金) | 移動(東京 発) |
| 10日(土) | 〃(モンテビデオ 着) |
| 11日(日) | 資料整理 |
| 12日(月) | 日本大使館表敬、打ち合わせ、INIA本部表敬、打 |

ち合わせ

林産品試験プロジェクトリーダーと打ち合わせ
13日(火) 移動(モンテビデオ→タクアレンボー)
14日(水) I N I A 林業部と協議
15日(木) 現地視察(採種園、次代検定林、産地試験林、樹種・
産地林)
16日(金) ♪ (霜害林分)、専門家の住環境調査(不動産
会社、市役所)
17日(土) 現地視察(試験採種園、霜害林分)、専門家の住環境
調査(アパート、スーパーマーケット)
18日(日) 現地視察(霜害林分)、資料整理
19日(月) 企業訪問(オリエンタル社、カハバンカリア社、) 3
チャンネルテレビのインタビューを受けた。
20日(火) 企業訪問(コフサ社)、I N I A タクアレンボー試験
場長及び林業部長と協議
21日(水) 移動(タクアレンボー→モンテビデオ)、農牧水産省
植林局長表敬
現地視察(実生採種園)
22日(木) ウルグアイ大学林学科教授表敬、日本大使館と打ち合
わせ
23日(金) 日本大使館へ報告、I N I A 本部へ要請内容の報告・
確認
24日(土) 資料整理
25日(日) ♪
26日(月) 移動(モンテビデオ 発)
27日(火) 移動
28日(水) ♪ (東京 着)

1-8 主要面談者

農牧水産省

Atilio Ligrone (植林局長)

ウルグアイ大学

Rafael Escudero (林学科教授)

造林企業

Garcia de Leon (オリエンタル社技師)

Federico Ley (♪)

2-3 アフターケア実施機関の現状及びプロジェクト終了後の活動状況

アフターケアの実施機関である I N I A 林業部は、部長と 4 人の技師及び 4 人の現場作業員で構成されている。林業部の活動状況は次代検定林、産地試験林、実生採種園等の定期調査及びデータ入力・解析。実生採種園からの種子採種、実生採種園の管理。クローン増殖技術開発等の本プロジェクトの継続活動が主体となっている。一方継続活動以外の活動状況は、立木の容積密度の測定技術開発、霜害抵抗性の検定技術、植林施業 体系、育林技術体系等の確立にも取り組んでいる。

3 要請の内容

3-1 要請項目

- (1) 霜害抵抗性のための育種
- (2) 材質育種
- (3) 交配・交雑育種
- (4) 林木育種へのバイオテクノロジー技術の利用

アフターケアの要請内容は、以上の 4 項目となっており、これらの項目の活動内容が記載されていなかったため、これらについては短期調査の中で明らかにすることになった。

3-2 調査結果

- (1) 霜害抵抗性のための育種

対象樹種：*E.grandis*

- ①霜害抵抗性検定技術の開発、冷凍庫に温・湿度調節器を敷設して、霜害抵抗性の特殊検定技術を開発する。
- ②霜害抵抗性候補木の選抜と霜害抵抗性検定、抵抗性候補木選抜基準を作成して、'97年冬期に大発生した霜害林分から、抵抗性候補木を選抜する。これらと 2 世代プラス木について霜害抵抗性検定を実施する。

- (2) 材質育種

対象樹種：*E.grandis*

まず改良が望まれる材質形質について、林産品試験計画のリーダーから情報の提供を得られた。改良が望まれる材木の内面形質としては、色々あるがそれらの中で飛び抜けているのが、材の割れと狂いに直接関わる、成長応力の大きさであろうとされた。一方立木の外面形態については、幹の通直性・緩慢性、落枝性、枝の太さ・岐出角度等が重要になるとのことであった。この情報提供を踏まえて I N I A 林業部と協議した。I N I A 林業部から、'93頃まではユーカリを 10 本伐れば 9 本までがパルプと燃材に使用されていて、材質が問題にな

るようなことはなかったが、つい最近になって製材業者、設計技師、建築業者等材木の利用者から、材質の改良について強い要望がだされたので、アフターケアの要請内容に入れたが、ウルグアイではユーカリの材質については、まだほとんど分かっていないのが現状である。また I N I A 林業部の中に材質について専攻した者もない。との説明があった。協議の中で立木のままで成長応力の測定ができる機器があることが分かり、材の重要内部形質が、立木のままで測定できるのであれば、特に材質育種として項目を設けなくても、*E.grandis*の2世代プラス木の選抜基準を、より材質の改良にシフトさせることで、事足りるとの意見で合意した。この合意内容について、カハバンカリア及びコフサの2企業の製材担当技師に説明して意見を聞いたところ、いずれの技師からも賛意が得られた。

(3) 交配・交雑技術

対象樹種：*E.grandis*

交配・交雑技術については、基礎技術開発のための調査にとどめて、具体的には交配袋の材質と大きさ、除雄及び受粉の方法等について、実施することとする。

(4) 林木育種のためのバイオテクノロジーの利用

対象樹種：*E.grandis*、*E.globulus*、*E.maidenii*

①クローン化技術、組織培養によるクローン増殖技術は、プロジェクトに派遣された短期専門家が、*E.grandis*を用いて開発した培地での、マイクロプロパゲーション技術を実用化するとともに、この培地組成を多少変化させて、

*E.globulus*及び*E.maidenii*へも試用する。

②2世代プラス木クローンのDNAによる同定・識別技術を習得する。このことは、ウルグアイに導入されたユーカリの原産地が、プロジェクトで導入された産地試験地用種子を除いて、明らかでない場合が多く、2世代プラス木クローン間の近縁度を明らかにすることは、近将来2世代プラス木クローンによる採種・穂園を造成する上で不可欠になる。

(5) アフターケアに育種事業の高度化を追加する件については、今回の協議の中で I N I A 林業部が*E.grandis*の2世代実生採種園を造成したこと、プロジェクトで造成した次代検定林及び産地試験林等からの、2世代プラス木の選抜を

強く希望していること、また2世代プラス木クローン採穂園からの、クローナルフォレスト用種苗生産など、林木育種事業の高度化に向けた取り組みに強い関心を持っていることが伺われた。J I C Aとしてもプロジェクトで実施した育種事業が I N I A 林業部によって継続され、目前に迫りつつある育種事業の

高度化への取り組みは、アフターケアの重点として位置づけられる。と、概略次のように説明した。林木育種事業を効率的に進める上で、連続性が重要になり、そのためには間断なく1歩1歩着実に事業と技術開発を相進める必要がある。育種事業の高度化の課題として2世代実生採種園の造成、2世代プラス木の選抜及びクローン養成等が考えられ、そのための最大技術開発課題は、クローン増殖技術であると考えられる。これに対しINIAタクアレンポー試験場長及びINIA林業部の合意が得られた。

4 ウルグアイ側のアフターケア実施体制

4-1 実施機関の組織及び事業概要

実施機関であるINIAは、半官半民の独立公共機関であり、本部をモンテビデオに置き、傘下にラ・エスタンスエラ、ラスブルハス、タクアレンポー、トレンタイトレス及びサルトグランデの5試験場を有している。これらの試験場は、それぞれの主要な農林牧畜生産地域に配置され、畜産、野菜・果樹、農業及び林業技術の開発、導入、適用などを通じて、生産者の利益に寄与することを目的としている。表-1は、INIAの大課題と小課題及びそれらを担当する試験場を示したものである。

表-1 INIAの大課題と小課題及びそれらを担当する試験場

大課題	小課題	担当試験場
家畜生産	肉牛	主：トレンタイトレス、副：タクアレンポー、ラ・エスタンスエラ
	乳牛	主：ラ・エスタンスエラ
	羊、山羊	主：タクアレンポー、副：ラスブルハス、トレンタイトレス
	放牧	主：ラスブルハス
	牧草	主：タクアレンポー、副：ラスブルハス、トレンタイトレス
野菜・果樹	野菜	主：ラスブルハス、副：タクアレンポー、サルトグランデ
	果樹	主：ラスブルハス、副：サルトグランデ
	柑橘	主：サルトグランデ
農業	冬作	主：ラ・エスタンスエラ 副：タクアレンポー、ラスブルハス
	夏作	主：ラ・エスタンスエラ 副：トレンタイトレス
	米作	主：トレンタイトレス、副：タクアレンポー、ラスブルハス
	農業経営	主：ラ・エスタンスエラ、副：タクアレンポー、トレンタイトレス
林業	林業	主：タクアレンポー、副、ラスブルハス

4-2 アフターケア（INI A）の予算措置

INI Aの収入は次の5項目から成り立っている。

(1) 農産品等を加工所に販売した場合に課せられる税金。

(2) 農産品等を輸出した場合に課せられる税金。

(3) 上記(1)(2)を加算した額と同額の資金が政府財政より支給される。

(4) INI Aの生製品の販売金。

(5) 世銀、米州開発銀行及び国際協力等。

‘97年度までは(1)(2)(3)が増加傾向にあったが、'98年度からはアジア及びブラジルの経済不況の影響を受けて、減少傾向にある。INI Aの'99年度予算概要は、(1)+(2)=400万ドル、(3)=400万ドル、(4)150万ドル(5)250万ドル

計1,200万ドルである。そしてINI Aタクアレンボー試験場の予算額は、INI Aの予算額の約20%で、林業部の予算は21,380ドル/年(場共通費を除く)で、ここ2~3年はほぼ同額である。

4-3 建物、施設

INI Aタクアレンボー試験場は、煉瓦造り2階建ての本館と、鉄骨垂鉛引き鉄板張り倉庫2棟からなっている。倉庫2棟のうちの1棟は、約半分が事務室と実験室になっており、残りの半分は車庫として使用されている。事務室等の配置は、半地下部分に実験室とトイレを、また、中2階部分に事務室及び会議室等が配置されていて、これらの施設のすべてを林業部が使用している。そして、プロジェクトで供与した苗畑作業場、発芽試験室、倉庫、ガラス室等は、2棟の倉庫に隣接して造設されている。また当然のことながら、林業部の実験室は本館の実験室と比較して充実しており、連日使用されて管理も行き届いている。

4-4 カウンターパートの配置計画

部署	氏名	役職
INI A本部	ペドロ ボニーノ	理事長
	エドアルド インダルテ	総局長
	ジョン グリエルソン	国際協力部長
タクアレンボー 試験場	カルロス パオリーノ	場長
	ソーラ ベナジー	林業部長
	グスタボ バルメジ	技師
	リカルド メトール	ク

イサベル トルヒージョ	ク
フェルナンド レスキン	ク
ラモン ガルシア	現場補助員
ロセベル シルバ	ク
ワルター ロドリゲス	ク
ホルヘ レモス	ク

4-5 政府関係機関の支援体制

農牧水産省植林局及びウルグアイ国立大学

5 アフターケアの基本計画

5-1 アフターケアの目的

林木育種事業を高度化することにより、国産優良種子生産体制の向上をはかり、木材の生産性と品質の向上及び環境保全の、より一層の推進に寄与する。

5-2 実施計画の概要

(1) 林木育種事業の高度化

- ① 2世代プラス木の選抜
- ② プラス木等のクローン増殖技術開発
- ③ 次代検定林及び産地試験林等のデータ解析による育種情報の収集
- ④ 林木育種のためのバイオテクノロジー利用

(2) 霜害抵抗性のための育種

- ① 霜害抵抗性検定技術の開発
- ② 霜害抵抗性候補木の選抜と霜害抵抗性検定

5-3 活動分野別協力内容

5-3-1 林木育種事業の高度化

(1) 2世代プラス木の選抜

選抜基準の作成と選抜、*E.grandis*については、選抜基準をより材質の改良に力点を置いたものにする。また、選抜基準の作成と選抜にはウルグアイ国立大学が関与する。

(2) プラス木のクローン技術開発

*E.grandis*の組織培養及びさし木については、根株から発生した萌芽枝、あるいは伐倒した丸太から発生させた萌芽枝を用いて、発根率の向上を図る。一方つぎ木については、同一個体の実生苗をつぎ木台木に用いることで、つぎ木不親和性を抑制する。また、*E.grandis*を対象として、発根性に優れた2世代プラス木クローンを用いて、クローナルフォレストリー用苗木生産を目的とした、低台採穂木を要請する。

(3) 次代検定林及び産地試験林のデータ解析による、育種情報の収集
データ解析による成長性の幼老相関関係から、成長性の早期検定期を推定する。また、成長性、幹の形態等の遺伝率を推定する。

(4) 林木育種のためのバイオテクノロジー利用
プロジェクトに派遣された短期専門家が、*E.grandis*を用いて開発した培地は、順化時に培地を洗除する必要がなく、効率的かつ順化率が大幅に向上したので、この培地によるクローン増殖の実用化をはかる。また、この培地組成を多少変化させて、*E.globulus*及び*E.maidenii*へも試用し、組織培養の技術開発に向けた取り組みを行う。さらに、2世代プラス木クローンのDNAによる同定・識別技術を習得する。

5-3-2 霜害抵抗性育種

(1) 霜害抵抗性の検定法を開発する。霜害抵抗性検定は霜害常襲地で行う自然検定と設備・機器を試用して行う特殊検定法が考えられるが、ここでは冷凍庫を使用して行う特殊検定法を開発する。

(2) 霜害抵抗性候補木の選抜と抵抗性検定、'97年冬季に発生した被害跡地で免害木を選出し、(1)の方法で霜害抵抗性を検定する。

5-4 専門家派遣計画

長期：チーフアドバイザー	育種	2000年	4月～2002年3月
調整員	育種	2000年	4月～2002年3月
短期：2世代プラス木の選抜		2000年	4～5月
材質		2001年	4～5月
組織培養		2000年	8～9月
クローン増殖		2000年	8～9月
DNA同定・識別		2000年	10～11月
データ解析		2001年	9～10月

5-5 研修員受入計画

気象害抵抗性育種	2000年	5～6月
組織培養及びDNA同定・識別	2001年	1～2月
データ解析	2001年	11～12月
林木育種(準高級)	2001年	10～11月

6 専門家の執務・生活環境

アフターケアに派遣される長期・短期専門家は、INIA林業部と倉庫に造設された実験室及び事務室を使用するので、当然のごとく夏季は暑く、冬季は

寒いが取り立てていうほどの不満はない。プロジェクトに派遣されたJICAの専門家も、ここでINIA林業部と一緒に業務を実施してきた。林業部だけが倉庫で業務を行っている理由は、林業部が他の部門より1年遅れてINIAに編入されたため、その時にはすでに本館が建設中で、設計変更が出来なかったことによるものである。

タクアレンポー市（正式には区）は、面積が全国で最も広く牧畜の中心地であり、肉牛と羊毛が主産品で、と殺場兼干し肉製造工場が唯一あるだけで、人口も6万人程度と、国の中でも少ない方である。しかし最近、ユーカリと北米産マツの植林面積が急増しており、国道から見えるタクアレンポー近郊の、景観が変わりつつある。INIAタクアレンポー試験場は、タクアレンポー市街の中心地から、約4モンテビデオ市寄りにある。タクアレンポー市街は小さく、人の動きも少なくて比較的安全な都市といわれているが、経済状況が悪化の傾向にあることからすると、日本人が住居とするには数階建てのアパートが好ましいと考えられる。しかし3棟ある6階建てのアパートも、そのうちの2棟にはほとんどオーナーが入居している。また、残る1棟のアパートも、不動産会社によると人の動きが少ない都市とあって、容易に空きそうにないとのことであった。したがって住居選びには困難を伴うと考えられるが、夜間照明がある中心街で、安全性に配慮されている家屋を探すことになる。一方生活に欠かせない食材の購入は、中心街に小さいながらもスーパーマーケットが3店あるので、ここで間に合うが、魚介類は冷凍メルルーサだけしか売られていない。